

AI活用を成功に導くデータ戦略

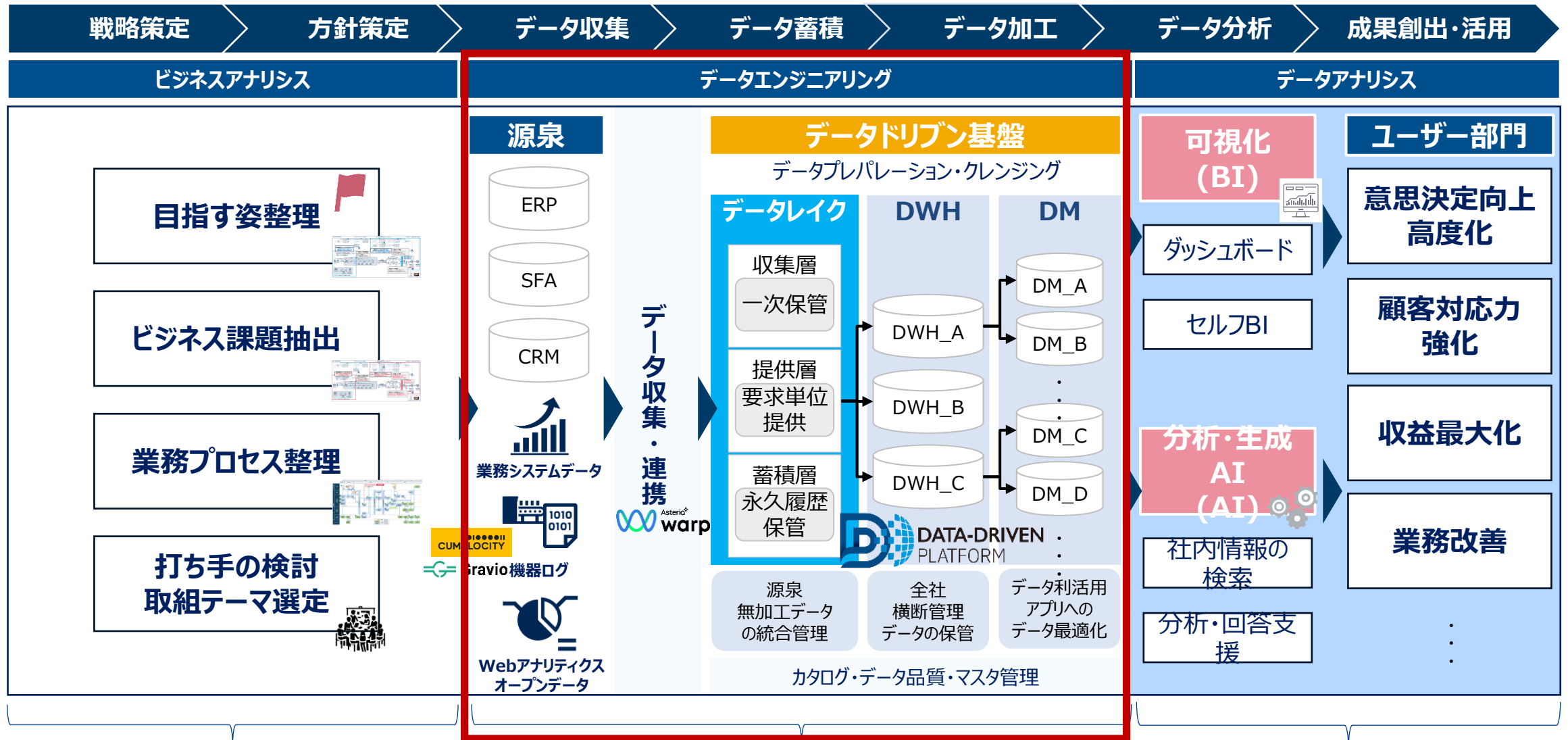
～SSOTに向けたデータ基盤の考え方～

2026年10月29日

パナソニック デジタル株式会社

北村 拓朗





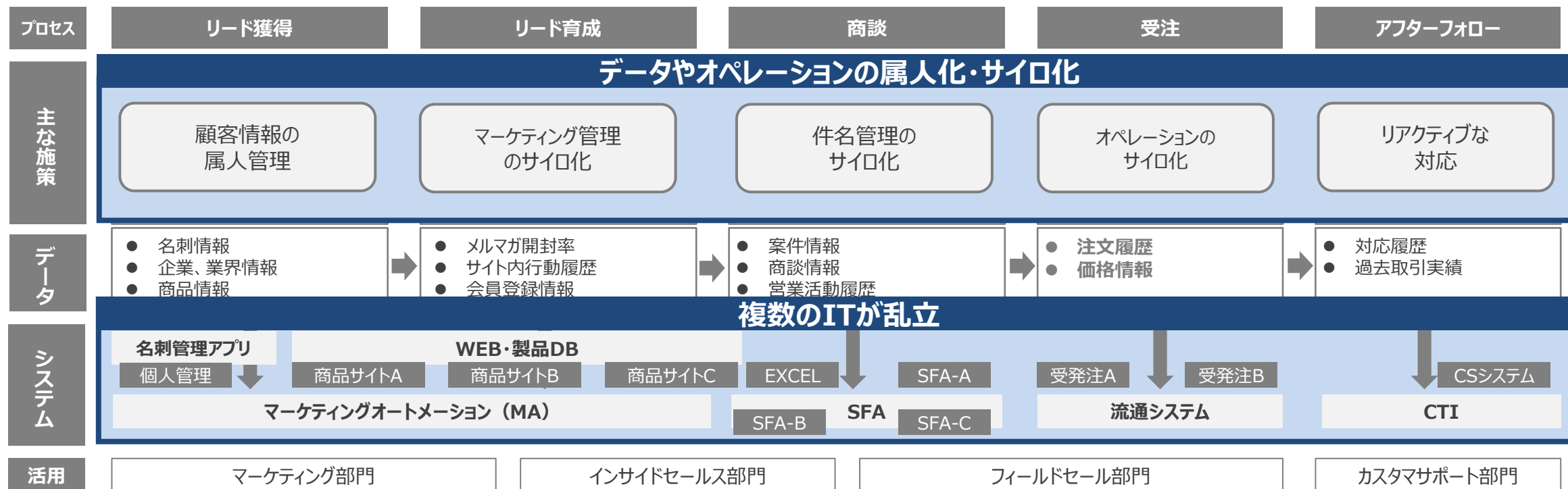
業務課題・活用目的

本講演：基盤の考え方

AI・BIでの活用

部門ごとに分かれたシステムとデータ

部門ごとのシステム導入で、データや業務が分かれている



社内にはデータがあるが、部門をまたいで使うには手間がかかる

AIの利用でも、どこに何があるかを整理する必要がある

定義が揃わないと、判断の前に確認が必要になる

数字が合わない



部門・業務・地域ごとに定義
・集計タイミングが違う

確認が始まる



会議冒頭で
「どの数字が正しいか」

判断が遅れる



意思決定ではなく
「確認」に時間が消える

現場は数字合わせに時間を使い、経営は確証を持てないまま判断を求められる



AIにデータを渡す場合も、定義と更新時点を揃える必要がある

業務を止めずに、AIへデータを届ける



業務システムの安定稼働を守り、
必要なデータを、必要な鮮度で、
権限の範囲内で使える状態にする

課題

本番DBに問い合わせが集中



対応

参照用データで負荷を分離

条件

最新の状態を確認したい



対応

管理されたAPIで必要分を参照

仮想統合でも、元システムに処理負荷が残る場合がある

SSOT : 正本とデータの定義を揃える

SSOT = Single Source of Truth

SSOT がない状態

- ❌ 同じ「売上」でも定義が違う
- ❌ 部門ごとに異なる数字を参照
- ❌ 議論が「正しさの確認」に戻る
- ❌ AIも参照先によって答えが変わる



SSOT がある状態

- ✅ 正本・定義・更新時点を共有
- ✅ 同じ条件で数字を比較できる
- ✅ 「なぜ」「次に何を」に集中
- ✅ AI・BIで共通の前提を使える

定義を揃えたうえで、収集・加工・更新を仕組みとして運用する

SSOT

何を正本とし、どの定義で扱うかを定める

+

自動化

決めたルールで収集・加工・更新する

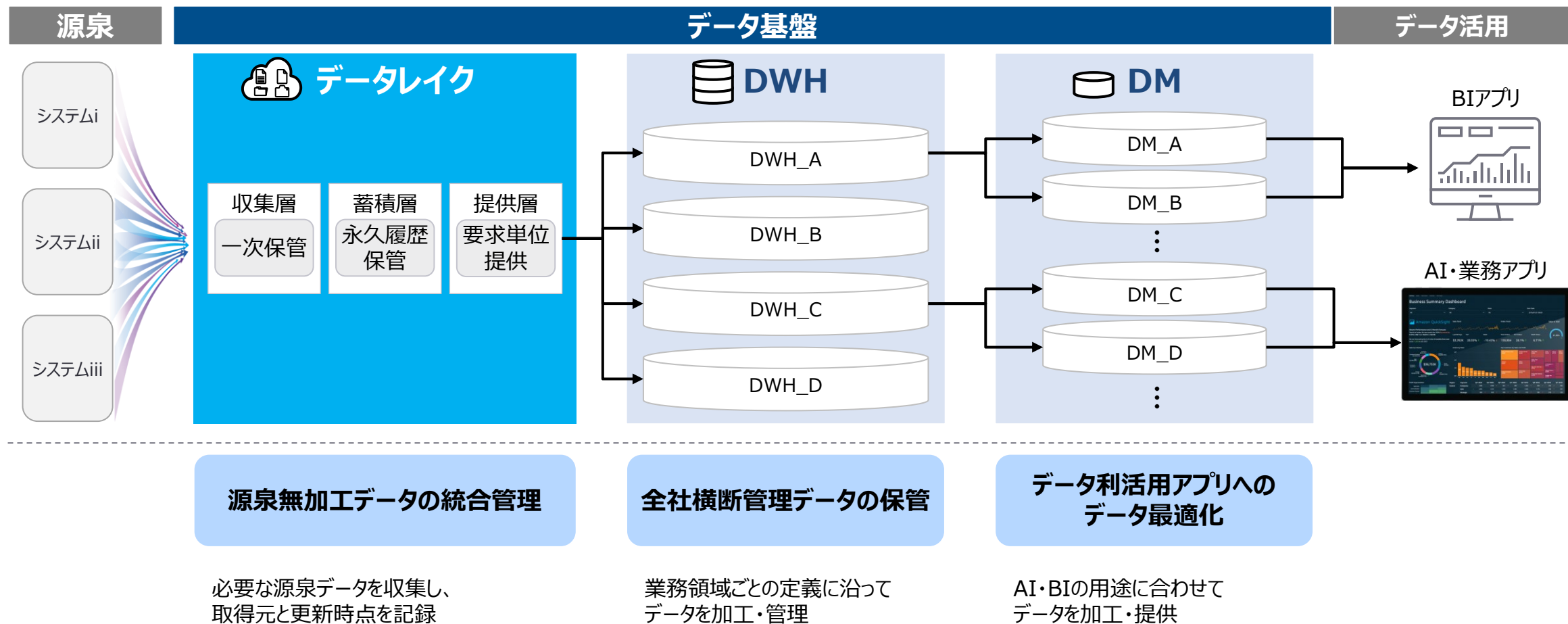


同じ定義・同じ時点の情報を、追跡できる形で提供する

- ✓ **業務データを参照用の基盤へ集め、共通のルールで加工・提供する**

SSOTと物理集約

正本・定義・更新時点を明確にしたうえで、参照用のデータを集約する。
コピーがあっても、出所と加工・更新のルールを追跡できる状態にする。



物理集約と論理統合を組み合わせる

データを置く場所が分かれていても、共通の定義と権限で利用する

分散したまま管理する必要もある

- ❌ 既存のデータ基盤を活かしたい
- ❌ 地域ごとに規制・制度が違う
- ❌ 移動できないデータもある

設計の考え方



用途に応じて集約と参照を選ぶ

鮮度・負荷・管理責任を確認する

利用者・AIからの見え方



共通ルールで利用

物理的な実体

参照用DB

DWH

クラウド
ストレージ

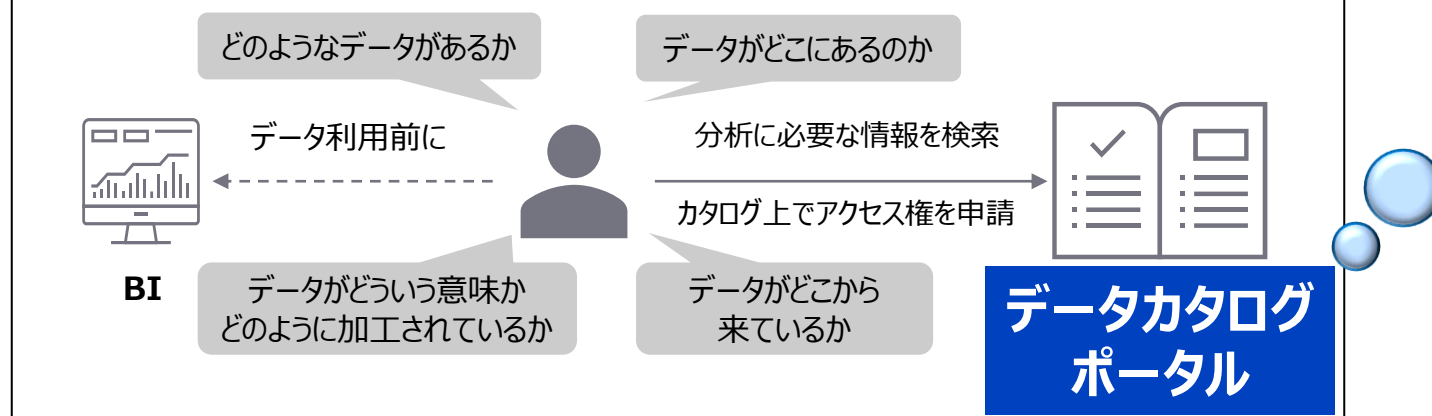
定義・権限の管理とアクセスの仕組み

仮想統合は負荷分離とは別。元システムへの影響を確認する

データカタログで所在・定義を共有し、利用するための権限を管理する

カタログ利用シーン

データの所在・定義等の情報を一元管理・公開し、ユーザーは欲しいデータを自分で検索
アクセス権の申請も標準化することでデータ利活用を推進



以下の要素を登録・公開するサイト

データの一覧

蓄積されているデータの一覧情報

データの所在

データがどこから発生し（データの出自）、
どのように変化し（データの加工処理内容）、どこに格納されたか（データ格納先・提供先）の情報

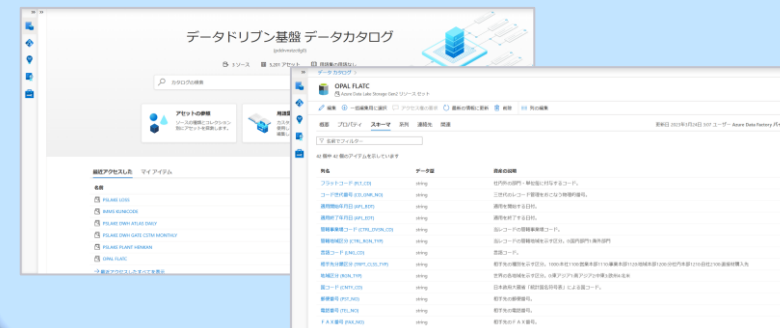
データの意味

データの業務的・システム的な意味や状態を説明する
情報



Microsoft Purview

データの所在・意味・出所を管理するためのサービス。
本事例では、カタログを通じた情報の公開と利用申請に活用。



経理部門と連携し、業務で使う用語と分かりやすい説明を登録

データドリブン基盤 データカタログ

- 組織名
 - 組織名
 - 組織名
 - ビジネスユーザー向けデータ
 - 生産-PSI
 - 財務会計



用語集の用語①

pddrvn_glossary
勘定科目別
商品別
月次
組織別
見通し

用語集の用語

pddrvn_glossary
勘定科目別
商品別
月次
組織別
見通し

列名	用語集の用語	データ型	列の説明
ND	年度	nvarchar	集計年度
CATEGORY	業務カテゴリ	nvarchar	集計業務カテゴリ(前年実績・計画・〇月見通し等)
TIME	期間	nvarchar	期間コード
DATASRC	データ種類	nvarchar	データ種類(IFRS調整後を示す1種のみ)
ENTITY	組織	nvarchar	組織コード
ACCOUNT	勘定科目	nvarchar	勘定科目コード
INTCO	相手先	nvarchar	相手先コード(特定の相手を示さないALL_INTCO1種のみ)
INPCURR	入力通貨	nvarchar	入力通貨コード(特定の通貨を示さないTOTAL_CURR1種のみ)
RPTCURR	換算後通貨	nvarchar	換算後通貨コード(JPY[日本円]、LC[現地通貨]、JPY_LYEAR[前年レート]、JPY_BPALN[計画レート]の4種)
PRODUCT	商品カテゴリ	nvarchar	商品カテゴリ(特定の商品を示さないALL_PRODUCT1種のみ)
NUMDATA	数値データ	decimal	数値(金額・人員)
BCO_NM	分社名	nvarchar	分社名(マスタにより組織コードを補足)
J_NM	事業部名	nvarchar	事業部名(マスタにより組織コードを補足)
BU_NM	BU名	nvarchar	BU名(マスタにより組織コードを補足)
HIN_NM	商品名	nvarchar	商品名(マスタにより組織コードを補足)
EVANET_NM	EVA-Net名称	nvarchar	上の拠点名称(参照不要)
ME	名称	nvarchar	拠点名称(Eva-Net名称や書式を調整・補足したもの)。拠点名称は本項目をご確認ください。
INPT_KYN_NM	入力通貨	nvarchar	上の拠点名称(参照不要)
LCTN_NM	所在地名	nvarchar	所在地名(マスタにより補足) 上の情報をベースに補足
CNTY_NM	国名	nvarchar	国名(マスタにより補足) 上の情報をベースに補足
KMK_BRI_NM	科目分類名	nvarchar	科目分類名(マスタにより勘定科目コードを補足)
AC_NM	勘定科目名	nvarchar	勘定科目名(マスタにより勘定科目コードを補足)
AC_DTL_NM1	勘定科目詳細①	nvarchar	勘定科目詳細①(マスタにより勘定科目コードを補足)
AC_DTL_NM2	勘定科目詳細②	nvarchar	勘定科目詳細②(マスタにより勘定科目コードを補足)

AIとBIで使うデータを整える

1

品質：共通の定義で使える

正本と加工ルールを明確にし、誤りや欠損を確認する

2

鮮度：用途に合った更新を続ける

必要な更新間隔を決め、いつの情報かを確認できるようにする

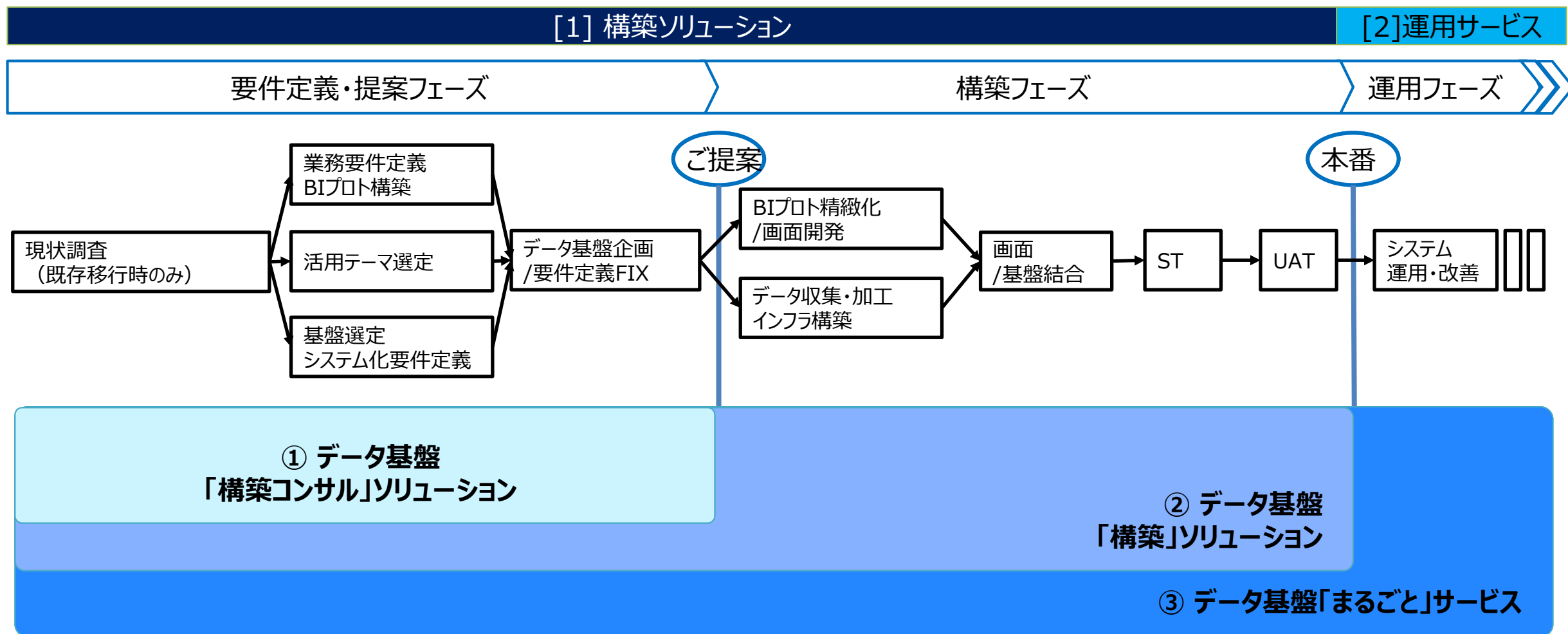
3

権限：利用者に応じて提供する

業務上の権限を守り、AIにも必要な範囲だけを渡す

今後の構想でも、SSOTを基本にデータの提供方法を設計する

データ基盤の企画から開発・運用・改善まで支援



SSOTを支える継続的なデータ連携

1



業務への影響を抑えてデータを使う

物理集約と論理統合を組み合わせ、参照の負荷を管理する

2



正本・定義・更新時点を揃える

AIとBIが共通の前提でデータを使えるようにする

3



収集・加工・更新を継続して運用する

どこから集め、どう整え、どう届けるか。連携の監視と復旧も含めて設計する

次の講演：ASTERIAを用いたデータ連携基盤の紹介



Panasonic